

報 医 世 々



目 次

- 巻頭言 「予防医療の緒に就いて」
鵜浦医院 院長 鵜浦 章… 2
- 理事会報告…………… 3
 - 平成27年度第3回理事会報告…………… 3
- 随 想
「開業医の定年」(最終)
鳥羽整形外科医院 鳥羽 義 紀… 5
- 「四国紀行」…岩手県立大船渡病院 星 田 徹… 6
- 医院紹介……………及川皮膚科クリニック
院長 及川 東 士… 8

大船渡市国民健康保険越喜来診療所

所長 佐々木 道 夫… 9

- 県立病院各科紹介
岩手県立大船渡病院 緩和医療科 村 上 雅 彦… 11
- 岩手県医師会野球大会報告…………… 13
- 事務局日記 …………… 15
- 編集後記 …………… 16
- 表紙のことば …………… 16



第 1 3 5 号
2015. 10. 30

気 仙 医 師 会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目 6 - 1
TEL:0192-27-7727 FAX:0192-26-2429
<http://kesen-med.or.jp/>

巻頭言



予防医療の緒に就いて

鵜浦医院 院長

鵜 浦 章

健康は個人の幸せの根幹をなすものだが、国においても益々重要なテーマとなっている。なぜなら、少子高齢化に伴い、医療費と介護費が増大の一途をたどるのに加え、高齢者を支える労働人口の減少が限界にきているからである。私は、自身が代表を務めるNPO法人「りくカフェ」との関わりから、健康増進を中心とした予防医療について考えるようになった。

健康を保つためには、一言で言えば良い生活習慣を続ける事である。しかし、長い間の悪習を変えるのは容易ではない。大病を患って気付くのが多くの人の常である。私は、意識改革の第一歩はまず体験する事、そして続けるのが楽しいと感じさせる事だと思っている。前述した「りくカフェ」の目玉は、塩分3.0g以下、600kcal前後で栄養のバランスを考慮した健康ランチである。新鮮な旬の食材を使い、味噌汁を薄味にして主菜をしっかり味付けするなどメリハリをつける工夫で、「意外に美味しい」と患者さんにも好感触である。食への意識が変わり、「これなら続けられる」と家庭での減塩に取り組む方が増えて来ている。

私の取組みは始まったばかり、まだまだやるべき事が多いと感じている。その中で最も重視しているのは青少年への健康教育である。それも実践的なものでなければならない。具体的に言えば、食に関しては減塩の他野菜を摂る事、よく咀嚼する事であり、学校給食を利用した親子食育セミナーなどもアイデアの一つである。その他、手軽にできるという意味で、深呼吸と風呂上りのストレッチをすすめている。これらの習慣は、幼少であれば苦もなく続けられるし、身についたら終生のものである。効果発現まで時間がかかるが、冒頭の課題に対する最も有効な手段ではなかろうか。

随 想

開業医の停年（最終）

鳥羽整形外科医院

鳥 羽 義 紀

初めて表題で「弧掌不鳴」に書いたのは平成3年（1991）50歳の時でサラリーマンの定年は55歳から60歳になっていた。その時私の停年は60歳になるか65歳になるかは患者さんが決定すると記していた。2回目は平成19年（2008）67歳の時で介護保険の導入が決まり、それに対応するため療養型病床の申請、施設の改造等のため60～65歳は疲労困憊状態に陥っていた。目標の65歳に到達を前にして患者さんに丁寧に対応する気力も薄れこのままでは医院の経営も困難になると思い大学医局から息子を召集した。当初は二人で働き体も楽になり体力維持のため仕事の後にゴルフ練習場に行っていたが間もなくその時間も取れなくなり、両手指のヘバーデン結節も悪化しゴルフクラブのグリップも次第に出来なくなっていた。そこで次に早朝ウォーキングを試みた。最初は河川敷をウォーキングしていたがコースも景色もマンネリ化し距離も7500歩程にしかならなかったので一万歩を目標に市内一周（自宅～警察署～日産プライウッド～商工会議所～太平洋セメント～猪川小～権現堂橋～自宅）コースで一万歩を越えるようになった。しかし帰ってシャワー、食事、診療開始時間を逆算すると4時30分位に起床しなければならなかった。少し出発時間が遅れると佐野橋から入ったり、中井橋でショートカットしたりしなければなくなり、それに雨天が続いたり、冬場は暗くて危険を感じた事もあり、それに代わるものとして天候にも時間にも左右されない自宅でのトレーニングを67歳頃からやっている。それは仕事終了後の月・水・金の3日間、理学療法室に設置しているエルゴメーターを脈拍一定（一分間100以上）に設定し1分間110回転位で15分間踏込、最後の5分間のクーリングダウンの低回転の間、過去に3回程患った肩関節周囲炎の経験から肩幅以上の棒を両手に支え上下左右斜位の運動

を体の前方と後法で合計120回動かしてエルゴメーターを終了する。続いて屋上（3階）までの階段を上りは2段ずつ登り屋上で腰部両下肢のストレッチングを4回繰り返し、その後器具を利用した腹筋運動を30回行い、さらに通販で購入した四つん這いで下半身を左右にスイングする運動器を使用する運動を現在も続けている。65歳からMRI、画像ファイリングシステムを導入して息子のアシスタント的に働くようになってから澁刺とした気分で働けるようになった。振り返ってみると自分の本当の停年も65歳位でなかったかと思っている。66歳の時には電子カルテも導入し当初とまどったが次第に操作にも慣れて、たまに処方する薬を思い出せず「アレアレ」と言って職員に聞くか「今日の治療薬」を参照していた手間が省け、瞬時に画面に表示出来るようになり大変楽になった。75歳の現在も働けるのは電子カルテのお蔭と思っている。最近は定年なく働ける開業医の幸せを感じている。周りから止められない限りトレーニングで健康の維持に努め80歳位まで働きたいと思うようになっている。

四 国 紀 行

岩手県立大船渡病院

星 田 徹

7月に所用があり始めて四国に行きました。その時の旅日記などを少々。

木曜日。大阪経由プロペラ機で松山へ。のどかな駅前から松山城の堀端を歩いた。お堀には所々に板が浮いていて、わりと大きな亀が7-8匹ずつくらい首をもたげて甲羅干しをしていた。思わず写真を撮って、中三の娘にメールを送ったけどいまだに返信はありません。

バスで伊丹十三記念館へ。昭和40年代くらいに俳優・才人として知られ、私も自宅の本棚にあった『ヨーロッパ退屈日記』にはまってしまいました。今ではだれでも知っているアルデンテなんて言葉も、日本に初めて知らしめたのは伊丹十三ではないかと思います。私の伊丹映画ベストスリー、③『ミンボーの女』いわゆるやくざ映画とは違う怖い人たち

の描き方が上手かった。②『タンポポ』伊丹エッセイファンがにやっとするネタがちりばめられたラーメンウェスタン。①『マルサの女 1と2』当時の日本にはなかった本格派犯罪映画。脚本、配役、撮影、美術、音楽などすべてが行き届いている。

その後松山城散歩。天守まではけっこうな運動になる山道。城下の公園では平日夕方の散歩やジョギング、キャッチボールを楽しむ人達がいっていい雰囲気。中心に大きな公園がある街は素敵ですね。

夜、ワインバーへ。お医者さんの奥さんがやっているそうでわりと素人っぽい店。フランス人のバーテンダーが一度客に出したグラスに遠慮なく鼻をつっこんで「まだ開いてない」とか「今開いた」とか言うのはお節介だけど外人だから許せちゃう。

金曜日。道後温泉へ。温泉につかり大広間でしばし涼む。歴代の『坊ちゃん』ドラマ・映画のパネルがあり、赤シャツや野だいこらの渋め脇役俳優達が懐かしい。小説『坊ちゃん』に道後温泉のシーンあったのかな？私の夏目漱石小説ベストスリー③『坊ちゃん』さわやかな痛快感が記憶にあり、またいつか読んでみたい。②『吾輩は猫である』いつ、どこから読み返しても面白いユーモア小説。①『三四郎』浪人の頃読んで面白かった青春小説というか淡すぎる恋愛小説。

バスで高松へ。とりあえずうどんを食べて、繁華街のはずれにあるロックバーへ。数人のバーテンダーが忙しく立ち働く広い店、壁にはレコードがびっしり。60-70年代のアメリカンロックを一曲毎にレコードを換えて、繋がりのある選曲で次々かけていくというある意味職人技。自分の知っているロックバーのイメージは、おやじが一人でやっている狭い店で、古いレコードをだらだらとかけ、客は40代から60代くらいのおっさんばかり、たまに自由に遊んでる感じの姐さん、というもの。この店はおやじ一人旅には向かなかった。たまたま見つけたワインバーへ。初老のワイン好きの紳士という感じの人がやっていて、中年女性のバイトが一人。なぜかこの人もお医者さんの奥さんで、松山でも高松でもワインバーの客は医者ばかりでした、自分もですが。

土曜日。ワインバーで教えてもらった直島にフェリーでわたる。小さな島全体に安藤忠雄設計の美術館や建造物がたくさんあり、バスや徒歩で見て回れる。夜は小さなロックバーとワインバーをはしご。

日曜日。バーで勧められた市内の公園を散策し、帰途につく。なかなか充実した一人旅でした。

医 院 紹 介

及川皮膚科クリニック

院長 及 川 東 士

及川皮膚科クリニックは平成16年8月3日、猪川町に開業させて頂きました。



診療内容は、皮膚科一般、液体窒素による疣贅の治療、乾癬・帯状疱疹後の神経痛・ニキビに有効的である光線療法などを取り入れております。さらに、自由診療ではありますが、ご希望の患者様にはAGAやVCステック・ローションなどの処方も行っております。手術・検査につきましては、外来で出来る範囲で施行しております。必要がある方は関係機関へ紹介させて頂いております。

スタッフは、開業当時看護師3名・事務3名でスタートしました。現在は看護師5名・助手1名事務6名で交代をしながら診療にあたっております。忙しい環境ではありますが、いつも楽しく・真面目に診療しております。



皮膚科にいらっしゃる患者様は、小さいお子様からご年配の方までと年齢層が広いです。待合室にキッズルームを設け、自動販売機では無料のお水・お茶が飲めるようにしております。

建物ですが、開院後、診察室付近を一度改装工事し、診察の流れを円滑にしました。開院してから10年経過しますと、靴の一足制に伴う床の張り替えや外壁の塗り替えなど、様々な場所で修復が必要となっていました。

電子カルテは開院以来導入しております。現在、カルテは紙カルテと電子カルテの両方を使用して診療を行っております。会計までの時間が多少ありますが、当院では処置が多いため一番効率が良いと思い使用しております。ただ患者数に伴い紙カルテが増えていくので、保管場所を考えなければいけない状況になっております。

患者様については皮膚科の減少に伴い現在は大船渡市・陸前高田市・住田町に加え、釜石市・大槌町・気仙沼市などからの患者様も半数近くになってまいりました。開業当初より、予約制を導入しておりますが、患者数の増大、朝早い時間と会社・学校帰りに集中することが多く、予約時間を越えることがあり、これからの課題となる点もあります。患者様のご要望に応えられるよう努力してまいりたいと思います。今後とも先生方のご指導・ご協力を頂きながら気仙地域の医療に携わってまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。



大船渡市国民健康保険越喜来診療所

所長 佐々木 道 夫

1 私が赴任してきた頃

私は1991年4月に三陸町国民健康保険越喜来診療所に赴任してきました。この診療所の沿革は古く、1941年に「医薬連気仙病院（県立大船渡病院の前身）越喜来出張診療所」として開設されています。その後、気仙病院の県への移管等により、1955年に越喜来村国民健康保険直営越喜来診療所となり、国保診療所としてのスタートを切ることになります。その後、綾里村、吉浜村と合併し町制がしかれたことにより、1967年三陸町国民健康保険越喜来診療所となっています。

私が来た頃の診療所は、古い木造の大きな建物で、入院設備もあり、使わないまでも、手術室までありました。大きな建物に、5～10人位の患者さんが入院しており、患者さんたちは部屋にこたつを持ち込んでそれぞれに暖をとっていました。詰め所は1階にあったのですが、夜になると、2階から、松葉杖にすがって足を引きずるように歩く音がし、行ってみても誰もいなかった、などという話を信じたくするような雰囲気 of 建物でした。下の図は当時中学生だった娘が描いた絵です。



2 診療所の新築と合併

古い建物が好きな私は、この診療所が気に入ってしまい、その後何度かあった新築の話も、このままでもいいから、と言って断ってきました。しかし、年々傷みがひどくなり、シロアリが大量に発生し、到底改築程度では済まなくなってきました。仕方なく新築することになりましたが、その新築

計画が町を二分する大きな問題となることになりました。有床診療所のままで行くか、無床診療所で行くかということが折しも迎えた町長選挙の大きな争点となってしまったのです。結果は、有床診療所を訴えた候補が当選しましたが、診療所の有床化は、あまりにも当時の医療状況に合わなかったためもあってか、いつの間にか無床診療所として建設が開始されました。診療所が新築されたのが、1996年4月で、完全に入院ベッドはなくなり、これから後は、二階を歩く幽霊も出なくなりました。

診療所新築にあたって、私は、ぜひ気仙杉をふんだんに使った木造の診療所を、と考えていました。そしてそのように話は進んでいました（と思っていました）。しかし、町長選を挟んでの建設計画です。いつの間にか、どこでどうなったのか、木造だったはずの診療所が軽量鉄骨へと変化した図面が出来上がっていました。話が違ふと文句を言おうにも、建設計画は出来上がっており、事実上くちばしを入れることなどできない状態でした。

診療所はとうとう出来上がってしまいました。なんとも愛着の持てない診療所でしたが、それに輪をかけるように出てきたのが大船渡市との合併問題です。診療所新築5年後の2001年に三陸町は大船渡市に合併吸収されてしまいました。望んで田舎の国保診療所に来たはずが、いつの間にか「市」の医療機関の職員となってしまいました。こんなはずではなかった、といううっ屈した思いは胸の中に沈殿したままとなっていました。

そのような診療所に対する思いが一変することになったのは、2011年3月11日のあの大津波でした。あの大津波で、診療所も床上1mまで浸水しました。周りの家が殆ど津波で流された中、どうにか形を残したのは診療所とそれに隣り合った市役所三陸支所くらいでした。もし、木造であったなら、診療所は流されるか、壊滅的な被害を被ったに違いありません。浸水したものの、診療所はしっかりと立っていました。軽量鉄骨だったからこそこのことであり、結果的に木造でなく軽量鉄骨で正解でした。そのおかげで、津波被災後、1ヶ

月という短期間で診療を再開することが出来ました。職員全員で、壊れたり流れてきたものを片付け、診療所の床、壁を磨き、窓ガラスを拭き、間に合わせの医療機器を取り揃え、待合室に石油ストーブをたくさん置き、といったあわただしい開設でした、患者さんも初日から沢山の方が見えました。職員や地域の人達の奮闘に感謝するとともに、頑丈な診療所にも又感謝せざるを得ませんでした。

3 診療所の医療活動

田舎の診療所というのはどこもそうなのでしょうが、どのような病気でもとりあえず診る必要があります。標榜している内科全般はもちろん、小外科的なこと、目、耳、皮膚なども一応診療の範囲に入ります。もちろん私の手におえないことも多く、結局専門の先生の手をわずらわせることが多いのですが、耳鏡、眼底鏡など一通り小道具はそろっています。病気になったときは「(三陸)峠を越える」前に診療所に行くということは、昔から患者さんのお決まりの行動のようです。

夕方になり、患者さんが切れた後は、訪問診療に出かけます。訪問診療は、私が来る前からこの診療所で行われていた活動で、私も引き続き行っており、月に30~40人くらいを診ています。在宅で最期まで診てほしいと希望する患者さんも多く、年間平均30人位の方を看取っています。

このような診療活動を支える我が診療所のスタッフは、看護師5名、ニチイ学館からの医療事務2名、その他に、役所から事務担当として1名、掃除のおばさん、患者送迎バスの運転手さんが1名ずつ、合計10名の人達が働いています。津波の時に仮設診療所で寝起きを共にしたこともあって、昼食時には事務室にみんな集まり、一緒に昼食をとるようになりました。賑やかで和気あいあいとした昼食風景です。

もうひとつ、診療所には市役所保健室が同居しています。専属の保健師さんが詰めていて、市職員の健康管理にあたっています。市職員の労働状況は、市民の皆さんが想像できないほど過酷なものであり、過労によるメンタル不調の職員が少な

くありません。そのため、私の医者としての仕事のかなりの部分をこの分野に割く必要があります。産業医活動が暇で仕方ないという時が早くこないものかと思っていますが、私の定年(70歳)までは難しそうです。

また診療所には津波以来、歯科クリニックが一緒に入っています。もともとこの歯科クリニックは、診療所のすぐ近くにあったのですが、津波で流されてしまいました。津波後まもなく自然と一緒に仕事をする事になりました。通院している患者さんにとっても便利ですし、私達も患者さんの必要な医療情報を交換できることもあり、助かっています。

あ、そうそう、忘れるところでした。今もっとも診療所でホットな話題は、川柳です。今年の春ごろ、事務の人が医療関連の川柳を待合室に貼り、患者さんにも「あなたも作ってみませんか」と呼びかけた所、思いもかけぬ大反響で、たくさんの投稿がありました。その中から私の独断と偏見で気に入ったものを、所長賞として選び、投稿されたすべての句とともに、待合室に張り出しています。毎月1回発表していますが、今のところ、投稿が途切れることもなく、続いています。その中から私が特に気に入った句をいくつか紹介して、医院紹介を終わります。

「あと、来れない」あれから何度の診療所
白内の手術終えたら鏡は要らない
愛情減り連帯債務が夫婦の絆
二人とも耳遠くなり別世界
浜仕事 老いて残るは しわと肌の色
鎮静剤 嬢(かかあ)の口に頼みます



県立病院各科紹介

岩手県立大船渡病院 緩和医療科

科長 村上 雅彦

平成19年4月がん対策基本法が施行され、がんによる死亡者数の減少とがん患者さんの療養生活の質の向上が二本柱として掲げられ、全国にがん診療連携拠点病院が、2次医療圏に1か所を目標に整備されました。気仙医療圏では、岩手県立大船渡病院が地域がん診療連携拠点病院に指定され、緩和ケアチームが設立されました。

緩和ケアチーム設立にあたり平成19年7月から緩和ケア推進委員会を立ち上げ緩和ケアチーム設立までの準備を行い、同年9月筑波大学緩和ケアチーム視察し、10月より緩和ケアチームの活動を開始しました。私は身体症状担当医師として、当初は、コンサルテーション型で、処方権を持たず、主治医に提言することを行っていました。しかし、緊急の場合、対応に時間がかかったり、提言がなかなか受け入れられなかったりすることもあり、現在は、状況によって処方権を持ち直接指示を出したり、転科していただいて実際に主治医として対応することも多くなりました。

チームのメンバーは、身体症状担当医師、精神症状担当医師、薬剤師、緩和ケア認定看護師が中心となり、がん相談支援センター、栄養課、リハビリスタッフとともに様々なつらさの軽減のために活動しております。

活動開始当初、院内でもまだ緩和ケアは浸透しておらず、活動を進めていく上で様々な困難もありました。

私が身体症状担当医師でしたので、患者さんの様々な症状をとる役割でしたが、オピオイドの基本的な使用方法と副作用対策を研修会で学んだだけでした。依頼を出す方も少し自分で勉強すればわかる程度の事は自分でやってしまうので、信用を得られるようになるまで、学ぶ機会をとらえる

べく、様々な場所へ足を運びました。

病院側の支援もあり、当院と同規模であり、すでに緩和ケアチーム活動を軌道に乗せていた市立秋田総合病院緩和ケアチーム視察し、同院で行われていたオピオイドを投与されている患者さんの状況、問題点の把握とそのフィードバックを目的としたオピオイド廻診も開始いたしました。

一度秋田へ転勤となりましたが、大船渡病院に再度赴任が決まった時に、緩和ケアチームに専従の医師として働いてくれないかという当時の八島院長の要請を受け、緩和医療科長、緩和ケアチームリーダーとして、再度働くこととなりました。

その後、秋田県の研修会の講師、ファシリテーターの手伝いに行った時、当時国立がん研究センター 中央病院 緩和医療科科長 的場元弘先生にお会いしたのがきっかけで、たくさんの貴重な学びの機会を得ることが出来ました。

特に、震災後には、多くの仲間のドクター、看護師、薬剤師さんたちと共に気仙に何度も足を運び、気仙がん相談支援センターの充実、がん患者（家族）サロン「よりどころ」の開始、気仙がんを学ぶ市民講座の開催と講師の確保、気仙がん診療連携協議会在宅ワーキンググループの開始と運営、医科歯科連携事業の推進のための助言、地域や全国の医療者や患者会との関係構築など、震災後の困難な状況にある気仙のがん患者さん、ご家族、医療者のために、困難な状況だからこそ全人的な苦痛の軽減を目標とした緩和ケアのかかわりが重要だとして、2年間 ARTSOAP（大船渡、陸前高田、住田町における緩和ケア連携体制の再構築を目指した活動）を推進していただきました。この活動は、病院側の許可と協力が無ければ、進まなかったことは言うまでもありません。

現在も、そのすべての活動は、地域の医療者が引き継いで継続しております。

特に、在宅ワーキンググループの活動は、伊藤院

長のご指導を受けつつ、在宅部会を作られた気仙医師会の滝田会長、岩渕先生、川合先生、山浦先生をはじめとした先生方、NST廻診に加わって頂き医科歯科連携事業を推進してくださいました及川先生、熊谷先生をはじめとした歯科医師会の先生、金野さん、大坂さん、横澤君をはじめとした気仙薬剤師会の薬剤師さん、入澤さん、佐々木さん、近藤さんをはじめとした訪問看護師の方々、保健所の職員の方々、鈴木さんや佐藤さんをはじめとした大船渡市、陸前高田市、住田町の保健師さんや職員の方々、臨床検査技師の岡本さん、訪問リハビリのスタッフ、大船渡市保健福祉部長伏木さんなど多くの方々と連携しながら活動を続けております。

これまでの経緯が中心になってしまいましたが、

現在、当院や岩手医大、東北大学病院、県立中央病院等、県内外の病院で抗ガン治療を終えられた地域の患者さんと、主に肺癌、消化器がん、頭頸部癌の患者さんを主治医としてみさせていただいております。また、緩和ケアチームとして他科の患者さんの苦痛の軽減のために関わらせていただいております。

外来では、火曜、水曜が診察日ですが、他科の外来を受診している患者さんは、その受診日に合わせて診させていただくことも多いです。

今後、気仙地域の緩和ケアチームとして、地域のがん患者さんの苦痛の軽減のために、医師会の先生方のご指導を仰ぎつつ地域に活動範囲を広げていきたいと思っております。



みんなの いわてを 医 協 ご利用ねがいます

医療用品カタログ通販 5,000品目満載 最大89%引き

医用印刷物・医療機器・医療事務機器・衛生材料等々・保険事業・医療廃棄物処理事業(収集から各種報告書作成まで)・福利厚生事業・労働保険事務代行事業

TEL.019-626-3880
購買専用
フリーダイヤル **0120-054-222**
FAX.019-626-3883

URL <http://www.ginga.or.jp/isikyo>
E-mail isikyo@rose.ocn.ne.jp

 **いわて医師協同組合**
IWATE MEDICAL COOPERATIVE ASSOCIATION
〒020-0024 盛岡市菜園二丁目8番20号 岩手県医師会館内

東日本大震災復興支援岩手県医師会野球大会

◇平成27年 8 月23日（日）

◇会場：盛岡市つなぎ温泉 ホテル紫苑

大会前日まで岩手県内は大雨が降り続き、果たして試合ができるかどうか開催が危ぶまれたが、案の定、前日の出発間際の午後 1 時30分ころになって大会本部から気仙医師会事務局に苦渋の決断で野球の試合は中止とする旨の連絡があり意気消沈。

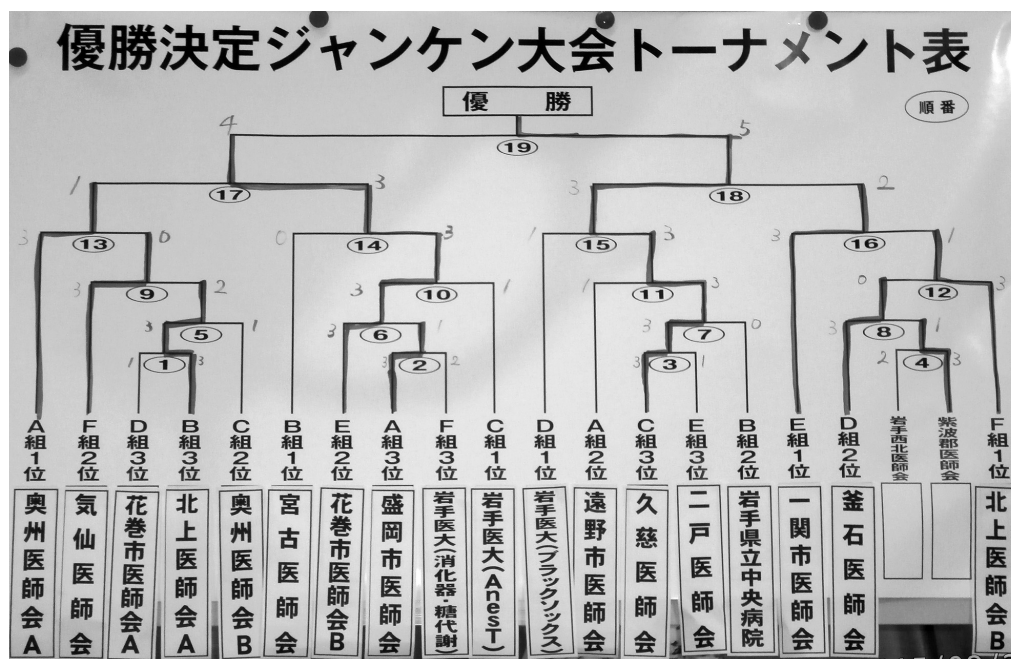
7 月から県立病院の研修医、若手医師を加えた新メンバーで何度か夜練習を積み、5 年ぶりに大会に参加する予定だったが、幻のチームとなったことは誠に残念でならない。

また翌日の朝には雨が上がって晴れ間が覗いていたのが余計に恨めしく、せめてひと試合だけでも野球ができなかったものかと悔やまれる。

恒例の優勝決定ジャンケン大会は当日12時からホテル紫苑で行われた。各チームの代表で予備抽選を行い、3 回戦からの好カードを引き当てた。1 回戦から準決勝までは各チーム 5 人でジャンケンを行い、先に 3 勝した方が次の回に駒を進めることができる。過去 2 年は 3 連続ストレート負けを喫していたので、今年は運を天に任せ先ずは 1 勝することを目標に初戦に臨んだ。初戦の相手は北上医師会 A チーム。当方は伊藤、星田、鳥羽、岩渕、渕向の順でジャンケンを行い、伊藤は 8 回アイコで粘ったものの負け、続く星田も負け、今年もストレート負けかと嫌なイメージが頭をよぎったが、そこから何と 3 連続でジャンケンに勝利し逆転勝ちとなった。たかがジャンケンされどジャンケンである。渕向先生が勝った瞬間、皆で小躍りして大いに喜んだ。準々決勝は奥州医師会 A チームと対戦、順番をずらしてみたが今度はいつも通りのストレート負けで敗退となった。

石川会長が「子供が出るチームが優勝するでしょう」と予言した通り、決勝は子供を多く出した久慈医師会と花巻市医師会 B チームとの対戦となり久慈医師会が 5 - 4 の接戦で見事優勝旗をおさめた。来年は奥州医師会の担当で開催される予定で、当医師会もできるだけ御子弟やお孫さんを引き連れて参加したいと思った次第。今回練習に参加して下さった県立病院の諸先生方、歯科医師会の諸先生方、MR、バイタルネットの方々、職員の皆様方に感謝申し上げ、また来年皆で野球練習ができることを願う。

（伊藤俊也）



雨天のため野球大会が中止となったジャンケン大会の カメラスケッチ



気仙医師会の精鋭



真剣な眼差しで「ジャンケンポン」



大会後の和やかな懇親会